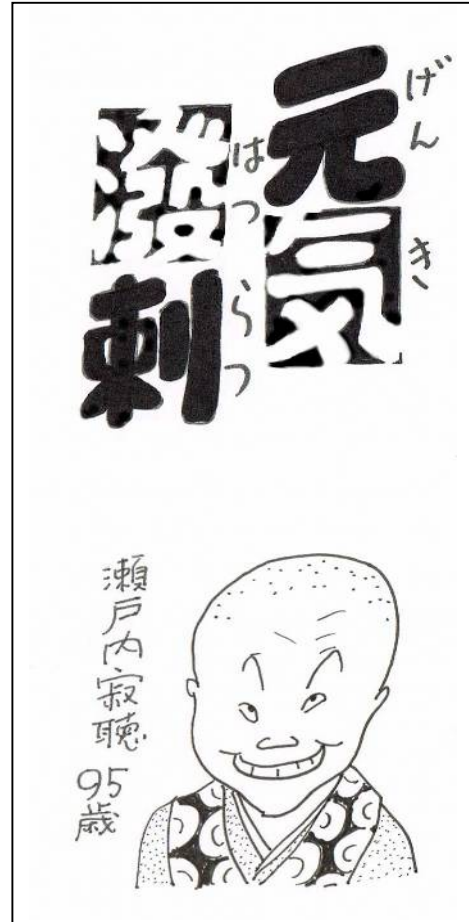


先週の回答



だんだん暮れていく人生。年をとっていき我が身を「もうあたしの出る幕はないんだわ」と加齢に嘆くのが遅暮之嘆(ちぼのたん)

そんなものにふけてヒマがないと飛び魚のように元気なのが、佐藤愛子、田辺聖子、瀬戸内寂聴のお三方の物書きトリオ。三人の合計年齢は278歳。平均年齢92・6歳。

まず佐藤愛子94歳は、ご亭主が会社を興しては潰しをくり返し莫大な借金を背負い込む。連日、玄関に居座る借金取り立て屋に「すみません、もう少し待ってください」と頭を下げるくらいなら自分で稼いで片付けてやると、昼夜兼行で小説を書き、原稿料で亭主の借金を全額返済し、それをネタにした小説「戦い

すんで日が暮れて」で直木賞を受賞したのはご存知の人は知つての通り。

借金亭主に泣きつかれた時の心境を綴つたのに『すまない、会社つぶれた』言うなり、みるみる目が充血して涙が溢れ出た。そのとき私は唾然とした。人によつては倒産した夫の涙を見て胸を衝かれ、共に泣く奥さんもいるだろうが、私は途方に暮れ、一瞬、シラけた」とある。このシラけたが彼女の真骨頂であるように思う。

それまでの男は強い者。女は男に庇護された生きる者。かなぐり捨てて、男社会に耐えてきた女性どもに喝を入れ、ヤケくそことばを並べて喝采を浴びた。「もつと罵詈雑言で世の中を叩いてくれ」と要求する(本が売ればいいから)出版社に応えて、さらに磨きのかかった

攻撃ことばで読者を魅了し、不動の地位を得て60年。

田辺聖子90歳の場合は、関西弁で捲くし立てているが、何歳になつても宝塚だ、古典の雅だ(源氏物語)「枕草子」を披瀝しながら、豊饒たる筆力がボケ防止に役立っている様子。

瀬戸内寂聴95歳は、ご存知のとおり小説家と袈裟がけの二足の草鞋で、人生相談なんかをしているようだが、言っていることは在り来たりことだが、袈裟の力は強く、聞く者を納得させてしまうようで、こちらも意気軒高。

この三人に共通している「年寄りは何寄りらしくって何なんだ。ヨボヨボしてろつてか!」の勢いがあるのは、物を書くからなの?



今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。